【ねがいましては】

平成２４年９月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２６３号

「信頼の根っこ」

いじめ問題が、ほぼ毎日のようにマスメディアをにぎわせています。多くの専門家の方々が、その解決の糸口を語っています。しかしそのほとんどが今の学校の基本をそのままに、方法論をならべています。

担任の先生方の資質や、学校側のいじめ処理のあり方など、専門家の方々に最も強く触れていただきたいものにほとんど出会いません。

評価です。

前回までの【ねがいましては】にも多く取り上げましたが、小学校入学時までの間に、子どもたちは家族から多くの信頼を受け取りながら成長します。大雨の日にお母さんが傘を持ってお迎えに来てくれたり、お弁当のおかずを見ながら何とも言いようのない幸せを感じたり、誕生日に家族との楽しい時間を過ごしたり・・・。子は家族から絶対的信頼を受け取っていきます。子にとっては『信頼』という言葉はむずかしいもの、体で、こころで、その本質をじっくりと吸収します。子の安心感に満ちた寝顔を見ながら、親はその瞬間の幸せを、家族一緒に生きることの幸せを感じます。

やがて小学校へ入学、それまでの信頼は学校での友だちへと移っていきます。やがてやってくる『信頼』の崩壊。その原因の筆頭格が評価だと思っています。ほとんどの子どもたちは、友だちへの気持を家族から受け取った信頼と同じ感覚で向けようとします。しかし、たび重なるテストが徐々に不安を作り出していきます。テスト→競争。競争は勝つか負けるか。もちろん勝つことが良くて、負けることは悪いという感覚を誰に教わるでもなく身につけていきます。

そしてひとつの感情が芽生えます。『人の不幸を望む』・・・。その積み重ねが『いじめ』。

いくら友だちであっても、一皮めくれば、それは紛れもない『敵』。テストの結果を超越してまでも、友情の方が勝る感情を手に入れるには相当の時間がかかります。まだまだこころの発達が未熟な状態にあって、友情優先の感情を手にすることは難しいでしょう。

そして時間が流れます。しっかり勉強はテストのために、勉強は成績のためにという感覚を何の疑いもなく手にしてしまった子どもたちは、常に友だちでありながら、常に『敵』という、なんとも表現しづらい感覚の中で生活し続けます。中学へ入学、さらに評価の内容はヒートアップします。教科ごとに出される学年順位、そして全教科での学年順位。まさに中学校生活は勝負の世界一色へと変貌します。教科だけではありません。学校での生活そのものも、評価の対象になります。「生活態度が悪いと内申へ響くよ」と、先生方は脅迫めいたことを言ったりもします。その裏側には、「とにかく君たち、静かにしておくれ、せめて私が本校にいる間は・・・。」のようにも感じてしまいます。

徐々に広がってゆく『信頼の崩壊』。友だちであっても、いずれは敵になるヤツだもの・・・信じてなんかやるものか。

それぞれの子どもたちの間に広がる、殺伐とした感情。それが当たり前・・・・・。

それはとても悲しい、切ない感情です。せっかくご家族から受け取った思いやる心は、評価によって微塵もなく消え失せていきます。それに一役買うのが親のひと言。「今まで、人には優しくしなさいとか、人の気持を考えなさいなどと言ってきたわりには、なぜ自分だけ成績が上がらねばならないのか、自分の順位が上がるということは、つまり他人の順位は下がるということ、おかしいよ。」この感情を手にするのは、ほかでもない本物のおもいやりをしっかりと手にしてきたお子さんだけです。物心ついた瞬間から、「人生は戦いだ、とにかく勝って勝って勝ちまくるのだ。人の気持ちなど考える必要などなしだ。」と育てられていれば、おそらく何の違和感もなく学校生活を送っているでしょう。

せっかく人と人が「しあわせ」を心のそこから感じることのできる『信頼』を手にしながら、「評価」は、その根っこを蝕んでいっていると思えてなりません。

ここでの時間の流れ方・・・お客様がみえると、自然に出てくるお茶やイス、まだ入塾間もない子が、ノートを使い終わりましたと申し出るや否や、さっと戸棚からノートを取って差し出す子。初めての子に、見てあげてと促がすと、今までに見たことのないくらいに必死なまなざしで教えようとする子。ランチが終わり、私が洗い物をしていると、誰となく隣で食器を拭き始める子。「もう時間だから終わりましょう。」と、声をかけると「ヤダー」と、不満を言い始める子。

その光景ひとつひとつが、『信頼』が生み出したもの。

評価というものをすべて無しにした環境下の学校を作ってみたらこんな感じなのかな。かれらは言葉ではいえない、表現できないものをここで実践しているのかな。

ただ危険なのは、勉強→評価の方程式を一度身につけてしまうと、もう本来の本物の勉強を感じ取るにはたいへんな時間がかかってしまうのではないかということです。ここでの彼らの行動は、いずれにせよ、学校での定期テストや進学のための勉強であるということなのです。結果、成績が上がっていれば誰もが喜ぶということです。成績の下がった友だちの心情を心から察してあげようとする子は少ないと思います。

やるなら小学校入学時より始めること。「勉強とは人への思いを育てるということなのだよ。」と、担任の先生がクラスみんなにささやくところからですね。